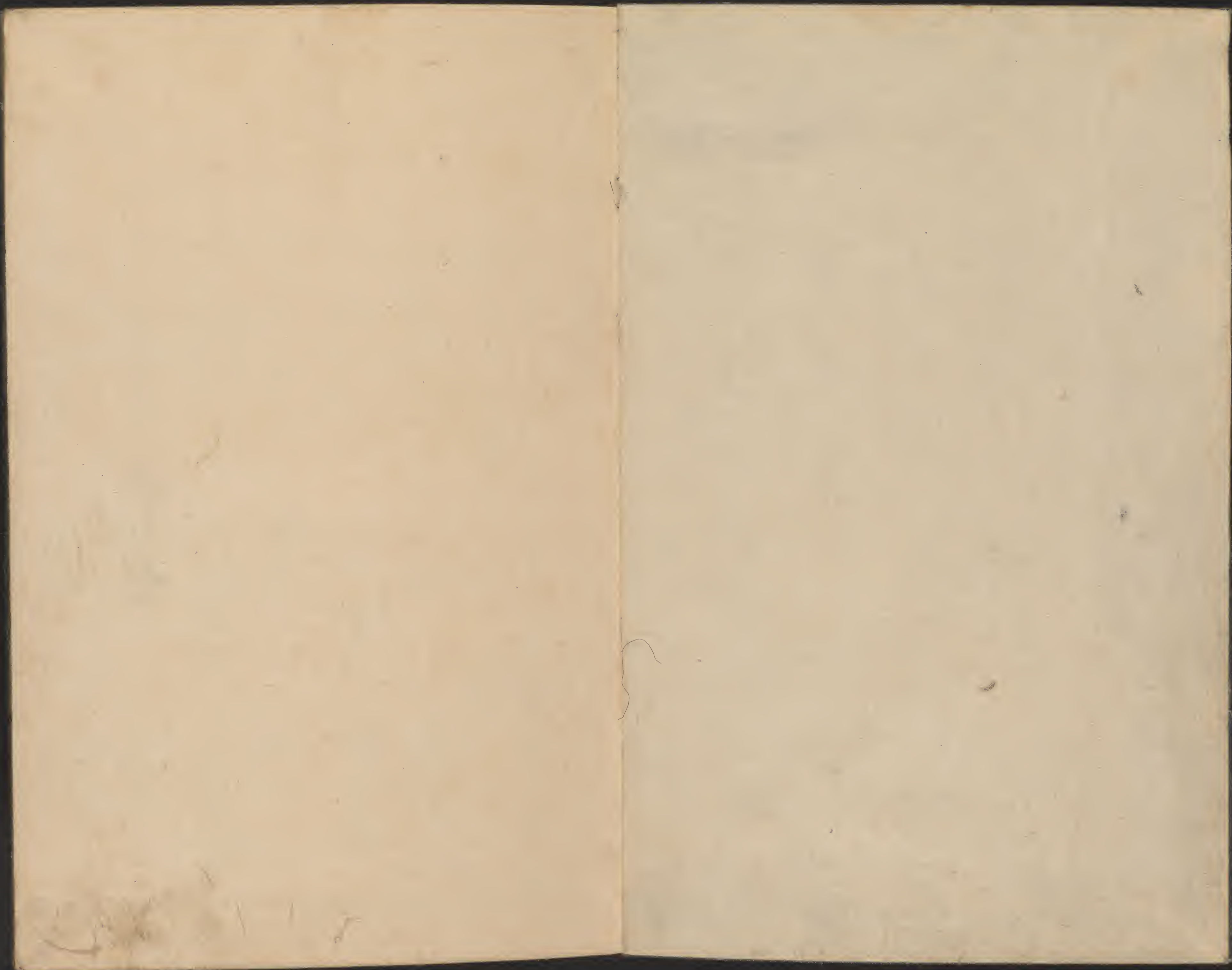


750

繪本直指寶

卷之下



繪本直指寶卷之六下目錄

福寿草 ふくぶし

芍薬 しやくやく

萱草 うんそう

映山紅 えいざんこう

山石榴花 さんじゆりか

栲躑躅 かうしゆく

杜鹃花 つげ

鸞尾 らんび

桔梗 ききやう

蕙蘭之圖 けいらんのず

幽蘭之畧 ゆうらんのりやく

菴荼之畧 あまたのりやく

蓮花 れんげ

拒霜 きそう

積桐 せきどう

秋海棠 あきあひら

長春 ちやうしゆん

芍药 しやくやく

水仙花

宇登野の葦

萩

葎

葎萩

雪中乃蘆

小点芦

竹

風面の貌

吳竹

烏系玉の葎

大竹葉紀

管玉

竹竿れ式

葎系小竹

後寿草

漢名を考へて此は臘月中向より花を咲かす明年正月をわりの花を咲かす
花より花配りより花の色を考へて花の白も花の赤も花の葉の形も花の葉の
花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も

花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も
花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も
花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も花の葉の形も



水仙花

牡丹

芍薬

宿翰うら苞とせと色は幹の本に似たり釋名中牡丹とせと凡る
 葉とせと凡る牡丹と花王とい芍薬と花相とと色は紅白牡丹と
 上より凡る牡丹と一重八重千条を清明の節盛なり一輪より二苞
 まで枝は幹毎一花を完く一枝之葉三枝九葉葉に破あり
 芍薬也此より苗を出ると二二三枝を葉或は三枝九葉一幹葉より
 枝を出り花とせと牡丹は葉より葉に破は花牡丹と似たり



大花のくせきんト重小花の
 一重八重のくせきんト重小
 花のくせきんト重小
 小花のくせきんト重小

葶子に云人の憂を蠲之と欲する内をこれに丹棘と号する者草と名付
 故也和名をわとれ草といふも同一なるものなり八重の丹棘は古の唐に
 茶うりといふ同葉が同じ記すに懐妊の婦人葶草花を佩せば男子
 とけむぬに宜男と名づく三日月花あり



葶草

丹棘宜男



開花のつとを添きあり一葉あり
 又いふ葉もあり色紅紫葉細文

花をわらわし人の
 三日月花あり

躑躅



三月の中

映山紅

二三月の中その葉は赤と白とが本のものでやみまみれ二つに分り
けさあしく色はくはくしくうきくあり葉は花の後に出てくるなり
紅葉して見ると此花は山崎園のうきくありのやうなり
その葉は赤と白とが本のものでやみまみれ二つに分り
三月の中その葉は赤と白とが本のものでやみまみれ二つに分り
その葉は赤と白とが本のものでやみまみれ二つに分り



花朱
葉白く
赤く

葉の赤黄緑
白くあり

山石

榴花

花朱
葉白く
赤く



本の家杜鵑花のてく枝車出たは大小の二つあり濃紅の内に強あり大い葉も大きなり四年の葉の
内より花をかく二月の葉は二月の比益の本よりやみまみれ花を本葉の後に出てくるなり
多づた大紅と紫と二色に白さるる又大向をこけりすやうけりては葉は赤と白とが本のものでやみまみれ二つに分り
小い花は葉は白くと赤とが本のものでやみまみれ二つに分り

花よりあて大に落しあはれいふはけ内長き葉なりすふどろ
うら母りてふ毛ありてさきはきやにありて

櫛躑躅

花生多下のくせまへ下らふま
中節三糸
こえ



花いろさきさきふはやくして
やをひくゆふさうもらほくとよ

美三
さき
さき

杜鵑花

花よりあて大に落しあはれいふはけ内長き葉なりすふどろ
うら母りてふ毛ありてさきはきやにありて

一梅美色千重
四ねのさけりり
名を遠近は

こけん花いやくきかきくまへて
りくゆこけんさきくまへて
やきさきの名は遠近は



無錫...
 之...
 六...
 下...
 之...
 下...

鳶尾

二月ふ花あり 雄雌様花あり 色紫 又白文各二あり
 何れ花大なり 葉を鳥髪り 如て先尖り 色黄緑也

花二ふりせきし全
 中ね色あら

五
 多



桔梗

六月ふ花あり 葉紫白の二あり 或ハ二ふり下はつがみあれば
 葉は若みなり 葉の二品あり 葉は若みなり 葉の二品あり



花ふりし
 生ふりし
 全

馬綿...
 後...
 續...
 六...
 六...

蘭譜

本草蘭草條下寇宗奭曰生陰地幽谷葉如麥門冬而潤且較長及一
 二尺四時常青花黃綠色中間瓣上有細紫點花開時滿堂盡香與他
 花香別時珍曰近世所謂蘭花非古之蘭草也黃山谷所謂一幹一花
 為蘭一幹數花為蕙者蓋因不識蘭草蕙艸遂以蘭草強生分別也又
 曰朱子離騷辨證言古之香草必花葉俱香而燥濕不變下略古之蘭
 似澤蘭而蕙即今之零陵香今之似茅而花有兩種者不知何時誤也
 ○唐士亦寇宗奭李時珍考之偽造也今本蘭草葉與花葉俱小
 花亦小和訓をぬらんとて和字を多くよみ事なり今新本其花葉のあり

七月
花あり



蕙蘭
之圖



花をよみぬらぬ葉のけさるゝをよみぬらぬとて
 又まづよみぬらぬをよみぬらぬとてけさるゝとて
 はまづよみぬらぬをよみぬらぬとてけさるゝとて

黒鏡集材編之續六之十

幽蘭之圖



蘭草澤菜一物二種あり俱く水の旁下濕の處に生る二月宿根より苗を生じ
 葉とてす紫葉素枝赤節緑葉に射して生を細齒あり但し葉を長く節長して
 葉に波あるをそ葉をさしては葉の莖方より節近く葉に毛あり○本草に昔
 處國ふおもたるは葉草の長く人初秋より白を採り花の態胡荽花に似たり
 莖の頭より傘にさくは葉の花は十はさみふ葉を同より小白花ありは花中より
 可斗等より白葉二種出たり葉はに香気あり花のりはてはあけいほは風ふはれて
 やうきまはいさうつゆはひきく白い風ふはれてある是まの葉草なり

蘭草の圖

七八月に花あり

是れは葉草なり赤は葉俱ふらむを多き花の潔氣をいとくはり
 ふらむらひのゆへに葉もさびきてみゆふとくつらうり此葉草なり
 さうく来羽の時持あるゆへに所々にあり古亦に
 くらむをぬわしはれもくはれもさびきてみゆふ野を乃秋風

花をてを向くはりあんだのど
 生あんだはさきごふんげさ
 葉らくしやう



馬綿袋後編之續六之十

蓮華

本名芙蓉といふ此花より蓮の實の名赤子花紅白二色
葉と荷と云居をくらすといふ形蜂乃葉に似る故くらと
名付又くらといふ花と用ひ耐の蓮と云葉は用ひ耐の荷葉と
いふ房を用ふ耐の蜂窠といふ

荷葉に踏蓮おまじ

あどのああり

蒲葦草を

用ひあり

六七月
花あり



花あんのどあり
そくえりりせきんが
四つ房ごめん
こたより
衣まきと云
れて
あざり
のりりり



馬綿枝後編之續六之五
 拒霜

拒霜

本芙蓉と云本芙蓉と云芙蓉と蓮乃なるなり本芙蓉と云葉の相のてく花の蓮花の色に似たりは白と一重と二重とあり又重なりは紅と中白とあり



花多しのて四と云なり
 本芙蓉と云葉の相のてく花の蓮花の色に似たりは白と一重と二重とあり又重なりは紅と中白とあり

馬綿枝後編之續六之五

五

楨桐
いざなり
 佐格桐根

凡そ木の根の末葉の間、明年の夏と宿花の根とを草の茎のくま
 茎の根に花と葉とを密く結相芙蓉牡丹等、草は通用ゆへに
 本中の草、花の色、皮をもにあつた、木の皮、花のくまらに似
 うてか、杏核のくまらふゆつらるる、葉とらるるのくまらに似
 るくまらるるのくまら

本草綱目拾遺卷之三十一 木部 楨桐



七月
 花あり

花より大くはれあり
 皆朱けえんがま



馬綿枝後編之續六

秋海棠

花は葩大ところ小ところ色落ぬけまん花のどく葉はひびく
わしいの貝のこしらきり表こたみどり裏を緑葉の久も月
どろりりりあくくくくあああつていこりにかきり



七八月に
花あり

花をさともはまんどのど
わり内あゆこよう
そくいさたより
生まんどの花みんひ
きこよう葉あくしやう
ちくわめくやうまんどのま



鳥綿後編二巻六十一
二五

長春

人家多栽之と挿亦蕃嫩より青く莖長く蔓硬く刺之莖小
に一葉を中うびるに花深紅子を花初る厚し

花せあんどのぐ

四月より五月まで

とくは花よりとまひり

くても白く

くま



四季に用い花あり

三月より五月まで

十二月まで

花あり



馬蹄後編江蘇省



南燭

蕪天竹木枝をとり牡丹小似なり葉見たん似て冬には赤ん
 ちを月系をあらと南天三日月小若葉と出六月月中旬に白
 と赤く実とじきんで秋久赤く冬月より紅いさんこの珠をけけ紅さとは明年
 花の比までありく色黒くや赤も福みくと煮ゆるいと実中夏に熟く中秋
 葉も冬月みよ紅赤と実の中白と明年果色となる葉本は實より日輪
 い草本を用ひてその竹よひは竹の赤と好むの實をさし葉藤だん枝本は牡丹の
 本のとくはなる葉にり有葉を紅赤と南天の汁を拂ひて葉に白と上葉あり

六月に花あり
赤白一

実朱



本葉より
朱す

馬橋新編 卷之三

水仙花

水仙花

花名を令盛浪臺と云



花ごんま

中々布あ方(白ろくま)

あわひごんま(ちりりま)

あまうりけふ中のこころ

ごんま(ちりりま)

葉をこもごんろくま

か白ろくま(ちりりま)





萩

般とくまのてく紫いろくまぐ中細白くまとてちかまがす極白く
 とはとだといふも此草に似たりゆゑあぐといふ



宇登野草

拵はまことのほふはいろくまのちかまがす極白く
 ありといふもといわり者こまの目々を其初の内はありといふ
 一とちりのちりちりきくゆくちかまがすといふ

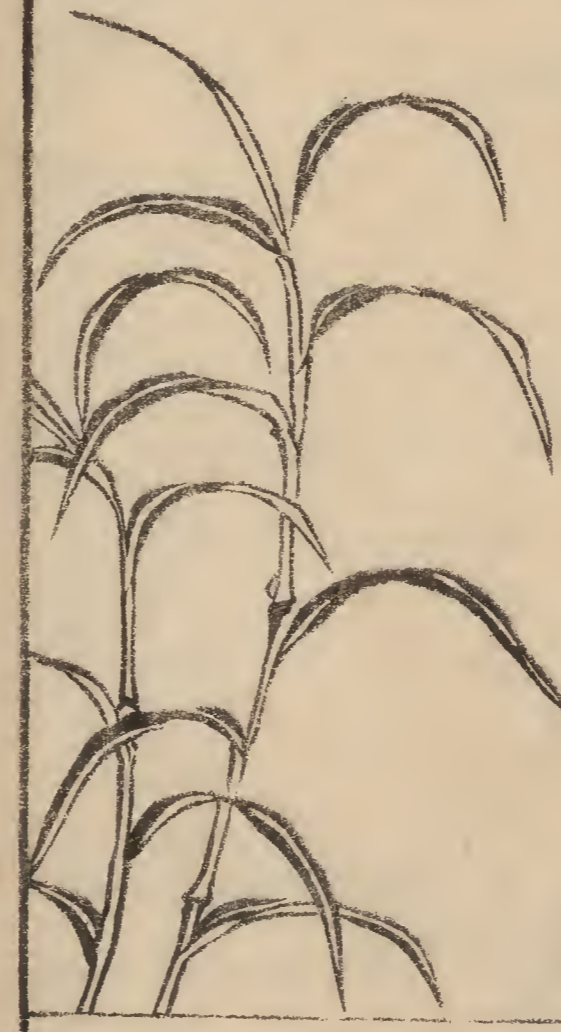
馬綿後編之續六之序

葭



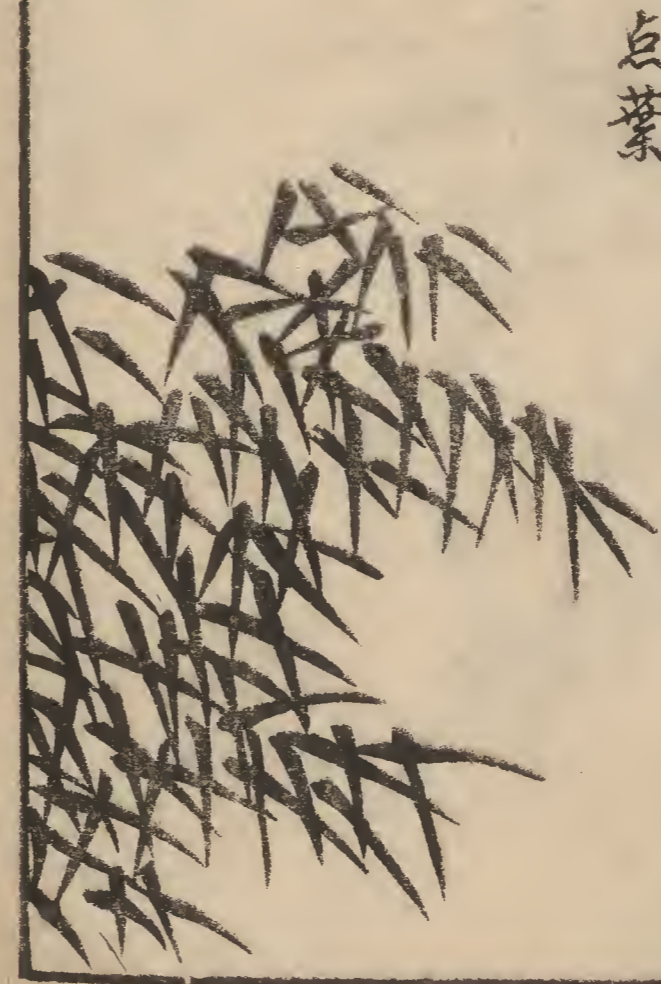
葭葉の細く長く、葉の裏に白毛が生ずる。冬になると葉が枯れ、白く変化する。その葉を乾燥させて、葭葉紙（わらび紙）として用いる。また、葭葉を煮て、葭葉汁（わらび汁）として用いる。葭葉は、葭葉茶（わらび茶）としても用いられる。

葭



葭葉の細く長く、葉の裏に白毛が生ずる。冬になると葉が枯れ、白く変化する。その葉を乾燥させて、葭葉紙（わらび紙）として用いる。また、葭葉を煮て、葭葉汁（わらび汁）として用いる。葭葉は、葭葉茶（わらび茶）としても用いられる。

葭



蘆



雪中乃蘆



江湖に畫用小点此葭



寫綿紙繪繪之續六

凡五竿稍頭放短漸々放長彼至節根又漸々放短立竿既定畫
 節為最難上一節要覆蓋下節下一節要承接上一節中間雖是
 漸離却要有連屬意思上一筆兩頭致起中間落下如月少彎則
 便見一竿圓混下一筆看上筆意趣承節不差自然有連屬意不
 可齊大不可齊小齊大則如旋環齊小則如墨板不可大彎不可
 大遠大彎則如骨節大遠則不相連屬無復生意矣

風
 雨
 貌



大竹

葉細



篁



草



吳竹

後竹

三名一貌あり

点葉



行

真



無錫... 金... 竹... 之... 六... 之...



若竹と云
 葉のよに似る
 吹らりと名づく

若竹 篔竹 箬竹 笹竹
 竹 竹 竹 竹



篆ハ古文字の筆立隸字ハ八分字此竹立り
 草書楷鏡當世用真乃筆立たり

竹竿此式

和歌集
 金葉集
 後撰集
 新編之類
 二二七

畫枝下筆須要道健圓勁生連綿行筆疾速不可
遲緩老枝則忽然而大起節祐瘦嫩枝則和柔而婉
順節小而肥滑葉多則枝覆葉少則枝昂風枝兩枝
觸類而長亦臨時有轉變不可拘於一律又大竹有
二種真竹大而籜有吳竹劣籜無點雖大竹葉不
過四寸淡竹不過三寸葉每莖二枚或三四枚

芳葉竹類

芳竹の種あり竹の葉も芳蘆に似る故に名を芳竹とす籜の類
竹の葉成長して竹の葉を脱墜蘆竹の類は籜とぬぐと籜
長く垂真竹は竹の葉短く芳竹の葉は長くて六七寸枝の節ありぬ
莖六七寸より十八九寸に似る一種葉大に度竿堅竹の節も籜竹に似
云根籜深籜ぬ籜各葉に似る竿も細く籜物なり

